

狩野山雪筆《歴聖大儒像》再考—林羅山の道統論を中心に—

水野裕史

狩野山雪は、寛永9年（1632）に松花堂昭乗の斡旋により《歴聖大儒像》を完成させた。本図は、尾張藩徳川義直の助力により林羅山の私塾とも言える学問所先聖殿のために制作されたもので、朝鮮通信使の副使であった金世濂による寛永13年（1636）の着賛がある。本図は、『羅山文集』や『羅山先生行状』などの同時代の文献史料に幾つか記され、制作状況や現在に至る伝来過程などが判明し、儒学の重要祭典である積奠のために制作されたものと考えられる。

さて、本図は、21幅あるものの、その全てが積奠に用いたわけではない。積奠に掲げる画像などの構成については、彫刻や画像、四配や儒者などに時代や目的に応じた組み合わせがある。《歴聖大儒像》については、宋儒6名のみを積奠に用いたとする『昌平志』巻一の史料があるものの、孔子など他15幅の使用については、詳らかではない。先行研究で指摘されるように、様々な形式の積奠に対応できるように制作されたと推測される。また、宋儒6名の使用については、朱子学を正統な儒学として根付かせようとした羅山たちの目的とする説が提示されている。

本発表では、羅山の道統論に注目し、朱熹の次世代にあたる南宋の積奠および絵画作例と比較することで、羅山の制作目的について改めて考えてみたい。南宋の画院画家の馬麟は、紹定3年（1230）に理宗の命により「道統十三賛」を完成させた。現在、台北・国立故宫博物院に《道統五像》として、伏羲、堯帝、湯王、禹王、武王の5幅のみが残る。理宗は朱子学に傾倒し、この図は、彼の政治的な理想像を表したものであった。この馬麟の画像と《歴聖大儒像》及び狩野派の「聖賢像」には幾つかの共通点が認められる。このことを糸口として、《歴聖大儒像》の制作背景には、南宋以降の儒学の影響があり、朱子学を正統な儒学として広めようとした羅山たちの意図があることを改めて指摘したい。